

19世紀ベトナムの家譜における祖先中心と子孫中心の系譜観念の併存とその意味

—青威県の右青威段族と左青威呉族を中心に—

Coexistence and its implication of 'Ancestor Type' and 'Descendent Type' on genealogical sense in the 19th century Vietnam's gia phả(家譜): A case study of Hữu Thanh Oai Đoàn Tộc(右青威段族) and Tả Thanh Oai Ngô Tộc(左青威呉族) in Huyện Thanh Oai(青威県)

趙浩衍（大阪大学・博士課程）

ベトナムには、始祖から世代を数える「祖先中心」型と、自己を起点に数える「子孫中心」型という二種類の家譜が存在する。一般的に、このような家譜の形式は、近世ベトナムの系譜観念とその展開が深く関わっているとされる。その理解に従えば、父系宗族(lineage)意識の強化によって、親属(kindred)意識に起因する「子孫中心」型から「祖先中心」型へと移行していったとされる。そして、その変化は主に19世紀中葉を前後にして起きたが、早くから儒教理念を取り入れオーソドックスな族譜に馴染んでいた上層の宗族は、すでに18世紀から「祖先中心」型の家譜を作成したと言われている。

しかし、そのような理解のあり方は、必ずしも実態を反映しているとは言いがたい。例えば、青威県右青威社の段族の家譜『段族譜』（1832・1858）のように、「祖先中心」型でありながらも、実は「子孫中心」の系譜観念が「礼」にかなうと主張した家譜が存在する。また同県左青威社の呉族の『呉家世譜』（1885）ように、一見「祖先中心」型に見えるが、その形式と内容に「子孫中心」もしくは「自己中心」の系譜観念が残っている家譜も存在する。

段族と呉族は、阮朝において代々挙人・進士を輩出した宗族であり、家譜編纂者の段仲暄と呉甲豆も官僚出身の儒教知識人である。かのような社会の「上層」に位置する宗族に属する彼らすら、「祖先中心」型の家譜を作りながらも、家譜において「子孫中心」型の考え方を捨てることができなかったのである。

ベトナム家譜における「祖先中心」と「子孫中心」の系譜観念の併存の主要因として、発表者はベトナムの祖先祭祀に注目する。一般的に、ベトナムの祖先祭祀は、基本的に四代祖以前の直系近祖のために行われる。始祖を含む五代祖以上の祖先を祭ることは儒教知識人の規範として存在し、彼らを祭る「祠堂」を揃うことも一部の宗族しかできないものであった。そしてベトナムで家譜は祭祀において「魂呼び(goi hồn)」を行う時の必須の資料である。すなわち、この祭祀が「自己」を中心に、しかも四代祖を越えない範囲で行われる限り、家譜から「子孫中心」の観念が払拭されることはないのである。

ベトナムランソン省チャンディン県ヌン語の頭子音の史的变化と声調の関係

The relationship between the tones and the historical sound changes of initial consonants in Nung of the Trang Dinh district, Lang Son province, Vietnam

平野綾香（大阪大学大学院博士後期課程）

Pittayaporn (2009)は、タイ祖語の有声音*b-, *d-, *j-, *g-, *ɣ-は現在のタイ諸語の大半で無声化していると指摘している。例えばタイ語では*b->p^h-, *d->t^h-, *j->c^h-, *g->k^h-, *ɣ->k^h-のように、タイ祖語の有声音がそれぞれタイ語の無声有気音1つに変化している。チワン語龍州方言では*b->p-, *d->t-, *j->c-, *g->k-, *ɣ->k-のように、タイ祖語の有声音がそれぞれチワン語龍州方言の無声無気音1つに変化している。一方、ランソン省チャンディン県のヌン語では*b->p-/p^h-, *d->t-/t^h-, *j->tc-/s-, *g->k-/k^h-, *ɣ->k-/k^h-のように、タイ祖語の有声音がそれぞれ2種類のヌン語チャンディン県方言の子音音素に変化している。本発表は、このようなヌン語チャンディン県方言の頭子音の変化の様相に、タイ祖語の声調による規則性が見られることを示す。

以下の(1)～(5)のとおり、タイ祖語の有声音*b-, *d-, *j-, *g-, *ɣ-はタイ祖語の段階の声調が*Bであるか否かによってタイ祖語の有声音に対応するヌン語チャンディン県方言の子音が異なる。

- | | | | |
|-----|-----|---|--|
| (1) | *b- | *be: ^A >pe ² (いかだ) | *bo: ^B (父、男) >p ^h o ⁴ (夫) |
| (2) | *d- | *da:k ^D >tak ⁴ (山蛭) | *di: ^B >t ^h i ⁴ (場所) |
| (3) | *j- | *ja:ŋ ^C >teŋ ⁶ (象) | *jaŋ ^B >săŋ ⁴ (重さを測る) |
| (4) | *g- | *ge:ŋ ^A >keŋ ² (カメムシ) | *gu: ^B >k ^h u ⁴ (ペア) |
| (5) | *ɣ- | *yo: ^A >ko ² (首) | *yam ^B >k ^h ăm ⁴ (夜) |

上の(1)～(5)のように、*b-, *d-, *g-, *ɣ-は声調が*B以外の場合はヌン語チャンディン県方言のp-, t-, k-に、声調が*Bの場合はヌン語チャンディン県方言のp^h-, t^h-, k^h-に対応している。*j-は声調が*B以外の場合はヌン語チャンディン県方言のtc-に、声調が*Bの場合はs-に対応している。

タイ祖語の有声音が無声化する際に声調によって無気音と有気音(*j-は破擦音または摩擦音)に分岐する現象は、ヌン語の全ての方言で見られるわけではない。Gedney (Hudak 2008)が示したWestern Nungというヌン語の一方方言では、*be:^A>pe⁴ (いかだ)、*bo:^B>poo⁵ (父)、*da:k^D>taak⁵ (山蛭)、*di:^B>tii⁵ (場所)、*ja:ŋ^C>caŋ⁶ (象)、*jaŋ^B>caŋ⁵ (重さを測る)、*gu:^B>kuu⁵ (ペア)、*yo:^A>hoo⁴ (首)、*yam^B>ham⁴ (夜)のように、*b-, *d-, *j-, *g-, *ɣ-は声調に関係なく全てそれぞれ1つの無声子音になっている。このように、タイ祖語の有声音*b-, *d-, *j-, *g-, *ɣ-がタイ祖語の段階の声調によってそれぞれ2種類の子音音素に規則的に変化する現象は、タイ諸語全般およびヌン語諸方言の中で広く観察できるわけではないチャンディン県方言特有の現象である。

TO・TRIPS協定下の新興先進国が更なる経済発展をするための知的財産法政策のあり方について

The role of the intellectual property law system of emerging developed countries under the WTO・TRIPS Agreement for undergoing further economic development

森 哲也（日本大学大学院法学研究学科博士後期課程）

例えば新興先進国 シンガポール国民の識字率と「潜在能力」は高い。そのシンガポールは、中継貿易に輸出志向型工業化政策を加えて経済成長し、「新興先進国」となった。

しかしその知的財産制度は、主として国営企業群やFDI・MNCsのような外資企業の活動のためにあり、その意義は歪んで特殊である。

そもそも知的財産制度の目的は、国民の知的創造を喚起して産業の発達に寄与させることであるから、何れの開発途上国でも、その制度設計と運用に国民に向けた工夫が必要となる。

それには、特許制度の特許要件「進歩性」を低く抑えること、国民の生活に根差した「中間技術」の保護が可能な小特許・実用新案の制度を設けること、意匠政府使用のような不合理な制度を廃止するなどして、制度設計と運用に「法の支配」の「実定性」を確保することが肝要である。

なお開発途上国には、当面は非科学技術分野の意匠制度・商標制度の強化普及がその産業の発達に効果的である。